

おはようございます。今日は皆さんに「思い」ということについて、「こう在りたい」「こうなりたい」「こうであって欲しい」という自分自身の心について、私の「思い」をお話しします。まず、あるエピソードを紹介します。

(要旨)

高校を卒業して20年ほど経った40歳前くらいの会社員が、ある新聞の記事を読んでいて、自分の高校時代を思い出します。高校野球の強い学校で、ピッチャーでした。甲子園の3回戦、延長14回の裏 2アウト満塁で、ホームランを打たれてサヨナラ負けをしてしまいます。負けたのは自分のせいだ、仲間に申し訳ないと、それっきり段ボールにユニフォームやグラブを入れて、野球を封印してしまっていました。

新聞で読んだ記事とは、「甲子園の大会歌『栄冠は君に輝く』作者の真実」というもので、その真実とは、新聞社が大会のために、大会歌の歌詞を公募して、5252編の中から最優秀作品に選ばれた加賀道子さんは、本当の作者ではなく、ご主人の加賀大介さんだったということでした。

加賀大介さんは野球少年で、いつも日が暮れるまで友達と野球をしていましたが、ある日右足の先から血が出て痛みだし、骨髄炎と診断されて、足を切断しなければならなくなりました。松葉杖の生活となりましたが、野球への思いを捨て切れず、近所の小学校の校庭で野球をする少年達の姿を眺めていました。

その後、文筆活動をしていた大介さんは、賞金目当てと思われたくなくて、奥さんの名前で応募しました。実は加賀大介さんが、野球への思いを込めて書き上げ、一番好きである「栄冠は君に輝く」という言葉を題名にしたこと、この歌が甲子園で始めて流れた時「やっと自分の夢が叶いました」と語っていたことが書かれていました。

この記事を読んだ会社員は、今まで何も知らずに歌っていた「栄冠は君に輝く」の歌詞には加賀さんのこんな熱い思いがつまっていたとは、とはっとします。あの日から今日までの日々が走馬燈のように駆け巡って、胸が締め付けられます。そして20年間一度も開けることができなかった段ボールを開けます。あの日夏の甲子園、仲間たちの涙、あのボールを投げた自分への後悔、まだまだ君の野球人生が終わってしまった訳ではないよと声をかけられた事など、すっかり忘れていたことがよみがえってきて、思わず「ありがとうございます」と、ボールに向かって涙声でつぶやきます。それから8年ほど経って、審判員になって甲子園に戻って来ることになります。

「ふるさとがはぐくむ 道德いしかわ」(石川県教育委員会)より

人生には、色々な出来事があります。しかしどんな時も「自分の思い」というものを大切にしたいと思いい、皆さんにお話ししています。

皆さん一人一人、自分が「いいな」と思うこと「これが好きでたまらない」ということがありますね。映画を見ても本を読んでも、それぞれ違った「ここに感動する」というシーンや場面があると思います。また、自分の周りの出来事などを見て、「カッコいいな」「こんな人にあこがれる」「いいなあ」と感動し、心を揺さぶられることがあると思います。そういう自分の気持ちや自分の心としっかり向き合って、それを大切にしてください。夏休みは、そのような自分を発見する機会を見つける絶好のチャンスです。

3年生の諸君は、高校最後の夏休みを進路に向けてしっかり取り組もうと計画していると思います。実際にはなかなかうまくいかなくて不安になったり、落ち着かず心が乱れて手につかないこともあるかもしれません。そのような時は、一度自分がどう思ってここまでやってきたのか、自分はどうしたかったのか、ゆっくり考えてみてください。自分の思いにそって考えることで、落ち着き、心が安定します。そして必ず自分にとって一番よいところへ行き着くはずですよ。

それでは、健康と安全に気をつけて夏休みを過ごしてください。そして、9月1日の始業式には、全員が元気に登校してください。

以上で1学期終業式の式辞とします。